
心の絆創膏

赤いからす

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

心の絆創膏

【コード】

N0652D

【作者名】

赤いからす

【あらすじ】

私はちよつとした傷、少し皮が剥けただけの傷とはいえない傷ができるとすぐに絆創膏を貼る癖がある。そんな偏屈な私は幼馴染みなのにひと言も口を聞いたことがなかった俊弘に無理やりデートに誘われることになった。

また、靴紐が解けた。きつちり結んだはずなのにまた解けてしま
う。結び直そうとしゃがむと雨上がりの湿気と相まってアスファル
トが八つ当たり気味に熱気をもろに顔へ直撃させてくる。

「あゝ暑い」

途中で諦めて汗を拭う。

「ぼくがやってやるよ」

彼が世話を焼こうと腰を下ろす。彼の顔が真正面にくると顎に柔
らかい髭の剃り残しが目に入った。

私とのデートなのに……。

「いいわよ」

私が強めに拒むと彼は苦笑いをしてやや距離をとる。その仕種を
見ているだけでイラツとして靴紐を結ぶと縦結びになってしまった。
2つのループが縦に並んで格好悪い。私はピンク色の絆創膏をバッ
グから出してループの結び目を摘み、横に曲げると絆創膏を貼って
留めた。

「おいおい」

彼はそんな私の不器用でいい加減なところを見て、珍しく呆れた
ような態度を取った。

「悪い？」

私はキツと彼を睨む。

「そんなこと……ないよ」

彼に私の行為を無理やり容認させた。

「私は絆創膏が好きなの」

ちよつとした傷、または少し皮が剥けただけの傷とはいえない傷ができる。私はすぐに絆創膏を貼る癖がある。幅19ミリ、縦72ミリの絆創膏を直接肌に接着させたときはもちろん、身につけている物に貼るだけでも心が引き締まる気がするのだ。

「行くよ!」

私は早歩きで彼を置いていく。

俊弘としひろとは幼稚園からの幼馴染み。熱々ハンバーグの上ののっているバターが溶けない距離に彼の家があったけど、地元の高校でクラスが一緒になるまでまともな会話なんてしたことがなかった。

お互いのお母さんが仲良しというだけで一緒に遊んだことなんてない。幼稚園のとき私が「遊ぼう!」と声をかけると俊弘は逃げていってしまった。照れていたただけとは思っけど、私にはいまだに頭から離れない忌々《いまいま》しい記憶として残っている。

2ヶ月前のクラス替えのとき、名簿が張り出された掲示板を見ていると俊弘が話しかけてきた。

「優奈ゆづな、同じクラスだな」

「そうね」

親しくもないのに馴れ馴れしく呼び捨てにされたので私は素っ気なく振舞った。「優奈、やっと同じクラスになれたね」なんて言われていたら蹴りをいれていたところだ。

はじめて会話をしてから1週間後、同じクラスの聡美と帰り道で別れると、それを待ちかねていたのか俊弘が後ろから走ってきて私の隣に並び、歩く速度を合わせた。

「よお、帰り?」

当たり前だろ！と思いつながら私は幼馴染みのよしみで軽く頷いてあげた。

「優奈、誰とも付き合わないのか？」

そらきた！と、私は内心勝ち誇った。クラス替えのとき、話しかけてきたのは私に気があるからだろう。でも、俊弘は私のタイプじゃなかった。彫りが浅くきつね目で実際の年齢より幼く見える。体の横幅が薄く、ヒョロとして線が細い印象は否めず、私はどちらかといえば沖繩に住んでいるような彫りの深い濃い顔のほうがタイプなのだ。

相手を傷つけない程度の台詞を考える前に俊弘の質問に答えてやることにした。

「いい男がいないからよ」

あえて高飛車な女になりきって嫌われる材料を与えた。

「そうなんだ。じゃあな」

俊弘が明るく手を振って別れを告げた。拍子抜けした私は立ち止まり、よくわからないが悔しさがこみ上げてきた。

なんだったのいまのは？

次の日の朝、私は屈辱感を引きずりながら家の玄関を出た。すると俊弘が私の肩を叩いて声をかけてきた。

「よっ、おはよう！」

やけにさわやかな挨拶をしてきた。私も礼儀としてひと言かえそうと思ったそのとき……。

「付き合おうぜ」

俊弘の不意打ちの告白は私の胸をキュンとさせ、不覚にも頷くという動作まで引き起こしてしまった。当然のごとくそれをOKの返事と受け止めた俊弘は笑顔を残して離れていく。

「ちょ、ちよつと待って……」

私が返事を撤回するために呼び止めた声は浮かれ気分の俊弘には聞こえなかった。それからは彼のペースで時間が流れ、デートを約束させられるはめになり今日に至った。

「せつかくの初デートなのになんでそんなに怒ってるんだ？」

追いかけてきた俊弘が面食らった表情で訊いてくる。断りきれなかった自分も悪いけれど、私が惚れていると勘違いされていることにも腹が立っていた。

「映画を観たらさっさと帰るからね！」

「そんなあゝ」

俊弘が甘えるような声を出してきた。私のイライラは頂点に達して早歩きに拍車がかかる。集中力が欠け、前を見て歩いていたのに、なにも見ていなかった。

俊弘の“あつ！”という空気が抜けるような叫びが背後から聞こえた。

私が振り向くより先にタイヤとアスファルトが擦れる耳障りな音と焦げた臭いが鼻をついた。

「痛ったあゝい」

私の口から言葉が出た。ということとは生きているんだと安心した。腰を上げようとするとフワ〜と信じられないくらい強い浮力で体が持ち上がる。体中を触ったがどこも痛くない。

私って頑丈だなと思いつながら周りを見たら四方が青空。

ここはどこ？

キョロキョロしているとなにやら下の方が騒がしく視線を下ろしてみる。

横断歩道に横たわる私の背中が見えた。涎のように口からだらしなく血を流し、ありえない方向に首が曲がっている。6メートル先に横転した750ccクラスのバイクの脇で運転していたと思われる男の人が腰を抜かしてフルフェイスのヘルメットを脱ぎ捨てると蒼白い顔をさらけ出した。交差点の真ん中でトラックが急停止し、ドアを開けて運転手が飛び出す。

きつとトラックの後ろを走っていたバイクが交差点で左折しようとして、歩道とトラックの狭い空間を狙った瞬間、赤信号なのに横断歩道を渡るうとした私を撥ねたのだ。

「優奈！」

俊弘が私の体にしがみつく。

そんなドラマのようなことしたって生き返るわけがないのに……私の頬に涙が伝った。

その後、私の体は救急車で病院に搬送され、電気ショックと担当医が手動で行う心臓マッサージが繰り返されたが、それらの蘇生処置の甲斐なく、私の体に死亡時刻が宣告された。

俊弘はしばらく呆然としていた。それから何かに気づいたようで慌てながら携帯であっちこっちに電話をかけはじめた。口がうまく回らず、泣き声まじりでなんとか説明していた。

病院へ最初に駆けつけてきてくれたのは担任の先生、それからほとんどなくして両親がやって来た。泣き崩れるお母さんに俊弘は「ぼくがデートに誘わなかったらこんなことに……」と声を詰まらせた。

そうよ、あんたのせいよ！

私は聞こえないのをわかっていながら俊弘に向かって悪態をついた。病院の天井で漂う虚しさを埋めようと底意地の悪さを出してしまった。

それからの私は俊弘の後を憑いて回った。

肩を落とし、食欲もないようで相当落ち込んでいる。私以上に幽霊に見えてしまう。神様の機嫌によって私はいつ消えてしまうかわからない。最後に慰めの言葉でもかけてあげられたらと思ったが、叶いそうもない。

私の死が俊弘の心にどれだけの傷を負わせたのか知ることなんかできない。できることなら私がいつも持ち歩いていたピンク色の絆創膏を貼って傷をふさいであげたい。

「ゆ……う……な」

俊弘が自分の部屋に一人で居るとき、私の名前をポツリともらした。

馬鹿ね……私のことなんか早く忘れちゃえばいいのに……。

日を追うごとに私の名前を呼ぶ頻度が増え、私は俊弘が心配になってきた。予感的の中。俊弘はフラフラと外へ出て車通りの激しい幹線道路に向かっていく。重い物を背負っているかのようにその歩き

方には元気がなかった。

俊弘が向かったのは私がバイクに撥ねられた交差点。縞模様がペイントされた舗装面をジッと見詰めている。信号が青なのに歩こうとしない。

俊弘……まさか。

歩行者用の信号が赤へと変わる。俊弘が歩く歩道のエスカレーターに乗っているような膝を使わない足取りで横断歩道の白線を踏んでゆく。俊弘の存在など気づかずに猛スピードで車が向かってきた。

私は無我夢中で車に突っ込んだ。が、車は抵抗感なく私の体を通り過ぎていく。

「俊弘！」

私の叫びは届かず、車が俊弘を突き飛ばした。

「キャッー」

という絶叫をしてハッと目が覚めた。自分の声で起きてしまったようだ。お母さんが私を凝視して“あらっ”と軽薄な声を上げた。泣いて抱きついてくるんじゃないかと思った私は母親の態度に意表をつかれ、少し落胆した。

「私は車に撥ねられたのよね？」

お母さんの袖を引っ張り尋ねた。私の腕に包帯は巻いてあったが、問題なく動かすことができた。

「覚えてないの？正確には撥ねられそうになって……軽く頭を打っ

たけどレントゲン検査ではなにも異常がなかったのよ。あとはすり傷だけね」

お母さんに余裕があるのは私のケガが死に至るものじゃなかったから慌てもしなかったみたいだ。だけど、途中で間を空けたのが気になった。

「私は確実に車に撥ねられたはずなのに……そうだ！俊弘は？俊弘は大丈夫なの？」

「506号室に……」

部屋番号が思考回路にインプットされると私はベッドから飛び下りた。お母さんがなにか言ったかもしれないが耳を貸さなかった。

スリッパも履かずに冷たいリリウムの床を蹴って廊下を疾走し、階段を駆け上がる。息を切らして506号室の前に立った。

『木村俊弘』のネームプレートを確認して入ると穏やかな空気が病室を包み込んでいた。首と足にギブスをつけているが、俊弘は隣りの患者と親しげに会話をしていた。

「馬鹿！」

私は怒鳴って俊弘を振り向かせた。

「優奈、目が覚めたのか」

俊弘はギブスしている方の腕を軽く持ち上げて元気なことをアピールする。

「なんであんたがケガしてるのよ？」

私はヒステリー気味に尋ねた。

「おれ、優奈を思い切り突き飛ばしたから……ごめん」

張り詰めていたものが一気に噴出しそうになり目に涙が滲む。私

は泣き顔を俊弘に見せないために病室から出た。

「お〜い、優奈」

俊弘の情けない声が聞こえる。私は病室の出入口のすぐ傍で壁にもたれて幸せを噛み締めていた。

愛情の欠片が剥がれ落ちないように心の絆創膏でしっかり彼を繋ぎとめようと心に決めた。

了

(後書き)

他にも作品をたくさん投稿しています。

恋愛(短編)で「木漏れ日から見詰めて」

ホラー(連載)で「狂犬病予防業務日誌」「無期限の標的」はすでに完結しています。

ホラー(短編)で「敵は全人類」「近未来の肉屋」「面相筆」「付きまとう都市伝説」「水たまり」「娘、お盆に帰る」「人類、最後の言葉」「彼女の好きなモノ」「忘れていたこと、忘れていなかったこと」など投稿しています。

読んでくれた方はお手数ですが感想と評価をよろしくお願いします。コメントは必ず返信します。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652d/>

心の絆創膏

2009年3月24日08時57分発行